紫式部と歌と友

小林賢太

大河ドラマの影響だろう、書店や雑誌で紫式部特集を目にする機会が増えた。紫式部といえば『源氏物語』が著名だが、人物像を探るには『紫式部日記』『紫式部集』が有効だ。これらを読むと、彼女の家族や交友関係が浮かび上がってくる。父や弟、夫や友人たちも登場するが、母に関する記述は見出せない。おそらく、かなり幼い頃に亡くなったのだろう。また、ドラマには登場しないが、若くして亡くなった姉もいたらしい。『紫式部集』には次のような記述がある。（　）内の漢数字は家集の歌番号。

紫式部が若い頃、姉が亡くなった。折しも妹を亡くした女性が身近におり、二人は「お互いを亡き姉妹と思ってお付き合いしましょう」と語り合う。手紙の宛名は互いに「姉君／中の君（次女の呼称）」と書き、親しく付き合った。だが式部は、国司に任じられた父と共に越前（福井）に行くことになる。一方、姉と慕う友人も肥前（佐賀・長崎）に行くことになった。彼女も家族が地方官となったのだろう。別れを惜しんで紫式部は次の歌を贈る。

・北へ行く雁の翼に言づてよ雲の上がき書き絶えずして（一五）

（北へ行く雁の翼に託してお便りを下さい。雁は翼で雲の上を掻いて飛びますが、お姉さまは「中の君」という上書き（宛名）を書き絶やすことなく、今まで通り親しくお手紙を下さいませ）

「うわがき」は掛詞。雁に手紙を託すという発想は中国の故事（雁書・雁信）に由来し、漢学の知識豊富な紫式部らしい一首である。親友からは次のような返歌があった。

・行き巡り誰も都にかへる山いつはたと聞く程の遥けさ（一六）

（巡り巡って皆、都に帰って来るのでしょうか。あなたが向かう越前の鹿蒜山や五幡という地名を聞くと、いつまた帰ることができるのか心細く、その日を遥か先のように感じてしまいます）

二つの地名は掛詞になっている。相手に縁のある土地の名を詠み込むのは、親愛や寄り添う心の現れである。紫式部もこの後、肥前に行った友に次のような歌を贈っている。

・あひ見むと思ふ心は松浦なる鏡の神や空に見るらむ（一八）

（お会いしたいと思う私の心は、お姉さまがいらっしゃる松浦の鏡明神の神さまが、空に映してご覧になっていることでしょう）

「見る」は「鏡」の縁語。肥前の地名「松浦」には「待つ」を響かせ、再会の日を待ち望む気持ちを込めている。だが非情にも、姉のように慕っていた親友は、肥前で帰らぬ人となった。帰京した彼女の家族から訃報を聞いた紫式部は、次のように嘆く。

・いづかたの雲路と聞かば尋ねまし列離れけむ雁が行方を（三九）

（その行き先がどこの雲路か分かるなら尋ねていくのに……群れの列から離れてしまった雁と同様、この世を去り、帰京の列から離れてしまったというお姉さまの行方を）

雁はこの世と冥界を行き来する鳥と考えられていた。

『紫式部集』にはこの他にも、友人たちとの贈答歌が記されている。紫式部というと内向的なイメージが強いかもしれないが、家集からは、歌を通して友と繋がる社交的な一面も見出せる。